

京の町のしのび歩き

辻 憲男（文学部教授）

垣根につるが青々と延びて、白い花がひとりほほえんでいた。なんの花かな、と源氏がつぶやくと、お供の者が「夕顔と申します。人みたいに、こんなところにも咲きます」と答える。軒の傾いたような小家つづきで、「口惜しの花の契りや。ひと房折りて参れ」とおっしゃった。するとその家の戸口から、黄の薄衣の童女が出て来て手招きをする。香（こう）の染みた白扇を、「これに置いて参らせよ」と言って渡した。枝の見苦しげなのを載せて、ご覧に入れた。さっきから白いすだれを透かして、美しい額つきの女たちがいるのが見えていた。涼しそうな夏姿も興味をひいた。あとで扇を見ると、それとなく光の君と言い当てたような女の歌が書いてあった。

源氏物語・夕顔の初めの場面。源氏17歳、この隣の家に乳母の病氣見舞いに寄ったのである。素性を明かさずに逢った。ところが八月十五夜の明け方、宿った廃院でものけが女性を襲った。源氏は病んだ。

『更級日記』の作者は、幼な心に、姉や継母が源氏の話をするのを聞いた。京に上って全巻を手にし、「後の位も何にかはせむ」と読みふけた。信心も忘れ、物語にのみ心を奪われた。美しい夕顔や宇治の姫君にあこがれた。薄幸のヒロインである。光や薫（かおる）のような貴公子を、年に一度でもいいから通わせて、山里に心細く隠し住まわされて、雪月花の折々にお手紙を待ち見などして…と夢想した。中流貴族の娘だから、相応のはかない境遇を予感したのか。古来、恋の行く末を描いた『夜の寝覚』や『浜松中納言物語』は彼女の作とする説がある。少しタイプが違う気がするが、あるいは少女の夢はつむがれて創作の世界に実現したのかもしれない。



下京区高辻通の“夕顔町”。某院は五条河原付近という。